

## プログラム名

---

東京慈恵会医科大学附属病院連携施設精神科専門医研修プログラム

## 募集定員

---

10名

## 研修期間

---

3年

## プログラムの特徴

---

東京慈恵会医科大学精神医学講座は明治36年(1903年)に精神病学教室として開講し、すでに110年以上の歴史をきざんできた。私学でこのような長い歴史を持つ講座は他にない。初代教授の森田正馬は、神経衰弱の領域でわが国独特の精神療法として森田療法を考案し、二代目の高良武久が広く普及させた。その後、当講座は精神療法のみならず生物学的治療法においても多くの研究者および臨床家を輩出し、日本の精神医療に貢献してきた。

基幹病院となる東京慈恵会医科大学附属病院の精神神経科は、東京23区内の大学病院の精神神経科としては数少ない開放および閉鎖病床のある入院病棟(49床)を有しており、隔離室3床を確保している。入院病棟は、救急症例、身体合併症症例、難治例などに対応する一方で、社会技能訓練(Social Skill Training; SST)、うつ病の集団認知行動療法、統合失調症の家族教室など様々なリハビリテーションプログラムも備えている。外来は月平均4,000名の患者数で、全科中4番目に多い診察をおこなっている。

この施設で、専攻医は入院患者の主治医となり、指導医の指導および看護師、心理士、精神保健福祉士らとチームを組み、急性期からリハビリテーションをまでを見据えた治療をおこなっていく。疾患としては、認知症を含む器質性精神疾患・統合失調症、感情障害から神経症、人格障害、さらには児童・青年期症例と幅広く経験できる。これらの症例に対し生物学的検査・心理検査を行い、薬物療法、精神療法、電気けいれん療法を含む身体療法などの治療を柔軟に組み合わせ、症例に適した治療を選択する経験をしていく。この過程でほとんどの精神疾患、治療についての基礎的な知識を身につけることが可能である。さらに、隔週おこなわれる月曜研究会に

参加することで、精神科専門医として習得すべき臨床的かつ学術的な知識を得、隔週おこなわれる症例検討会と抄読会で自らが症例を発表し、海外の最新文献を紹介することで、リサーチ・マインドを育むことができる。

連携病院としては、まず東京慈恵会医科大学の他の3附属病院である葛飾医療センター、第三病院、柏病院がある。葛飾医療センターは地域密着型の医療機関であり、精神神経科は外来業務をおこないリエゾン精神医学領域の活動を重視している。第三病院は外来および我が国でも稀な森田療法の専門治療施設である森田療法センターとして入院病棟20床を有している。柏病院は外来診療をおこない、特に精神科救急、コンサルテーション・リエゾンに力を入れている。

その他の連携施設として、大多喜病院、川室記念病院、湘南病院、総武病院、那須高原病院、成田病院、西熊谷病院、平川病院、北辰病院、町田市民病院、横手興生病院(五十音順)があり、地域医療の中核施設としての機能を担っている。さらに、栃木県精神保健福祉センターは、行政機関と連携して精神障害の予防から、社会復帰の促進、社会活動への参加の促進のための援助に至るまで広範囲にわたる活動をおこなっているため、行政と連携した精神医療の習得が可能である。専攻医は、これらの特色のある施設での研修を通じて様々な症例を経験することで研鑽を積み、臨床能力を向上させ、さらに幅広い学術的知識を習得できる。

「病気を診ずして病人を診よ」とは、当院開設者の高木兼寛の言葉である。「精神医学は脳科学の時代である」と言われて久しくなるが、当大学では、開設者の言葉を常に心に留め、診療にあたっている。この、シンプルだが行い難い言葉を胸に、少しでも「ひとのための精神医学」に貢献できるよう医局員一同励んでいる。